

ワーズワス『抒情民謡集』(Lyrical Ballads) に見られるロバート・バーンズの影響

浅井 三津恵

はじめに

ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) がロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-1796) の詩と初めて出会ったのは、1787年ワーズワスがケンブリッジ大学の学生となった17歳の時であった。ワーズワスが手に入れたのは1786年にキルマーノック (Kilmarnock) で出版されたばかりの処女詩集『主にスコットランド方言による詩集』(*Poems, chiefly in the Scottish dialect*, 1786) であったが、以来、ワーズワスはバーンズを終生尊敬し続けた。『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798) の初版が出た翌年1798年には、コールリッジへの手紙で以下のように述べている。

...(in Burns' writings) everywhere you have the presence of human life. The communication that proceed from Burns come to the mind with the life and charm of recognitions. But Burns also is energetic solemn and sublime in sentiment, and profound in feeling.¹⁾

また、1842年ワーズワスが72歳のころ、「バーンズの墓にて一死後7年目に」("At the Grave of Burns 1803 — seven years after his death") に

つけた註では、キルマーノック版詩集以来、バーンズの影響を受けたことを述べてから、歳を経ても変わらぬバーンズ崇拝のことばが語られる。

It gives me pleasure, venial I trust, to acknowledge at this late day, my obligations to these two great authors, ...²⁾

本論では、ワーズワス自身も認めている、ワーズワスへのバーンズの影響が、『叙情民謡集』にどのように見られるか、また両者の違いはどこにあるかを、『抒情民謡集』やその他の作品を取り上げて考察したい。

キルマーノック版『詩集』「序文」と『叙情民謡集』「序文」

1786年7月、バーンズはエアの町キルマーノックで処女詩集『主にスコットランド方言による詩集』(44篇)を出版した。そのころのバーンズは恋愛問題のもつれや、借金に苦しんでおり、ジャマイカへの移民を決意して、そのための旅費を工面するために、それまで書き溜めていた詩作品をまとめて出版したのである。これが好評を博し、翌年4月には増補版がエディンバラで出版(66篇)された。さらに1793年にはエディンバラで、86篇をおさめた2冊本が出版されることになる。

このキルマーノック版の「序文」('Preface')でバーンズは以下のように述べている。

Unacquainted with the necessary requisites for commencing Poet by rule, he sings the sentiments and manners, he felt and saw in himself and his rustic compeers around him, in his and their native language.³⁾

すなわちバーンズは、その作品の題材、登場人物、そして使われる言葉まで、

自分の周囲から取材していると言っているのである。これは、ワーズワスが『抒情民謡集』「序文」で述べた言葉と驚くほど重なっている。

The principal object, then, proposed in these Poems was to choose incidents and situations from common life, and to relate or describe them, throughout, as far as was possible in a selection of language really used by men, and, at the same time, to throw over them a certain colouring of imagination, whereby ordinary things should be presented to the mind in an unusual aspect; ... Humble and rustic life was generally chosen,⁴⁾

1798年、ウィリアム・ワーズワスとサミュエル・テイラー・コールリッジはドイツ留学の費用を得るために、お互いの作品をまとめ、『抒情民謡集』として匿名で出版した。ここには23篇の詩が収録され、巻頭に「趣意書」('Advertisement')が掲げられた。その評判が思いのほか良かったため、1800年、実際には1801年1月に、初版の「趣意書」を長文の「序文」('Preface')に代え、ドイツ滞在中の作品および帰国後の作品を加えて二巻本にし、著者としてワーズワスの名を出して、『抒情民謡集』第二版が出版された。

ワーズワスは『抒情民謡集』に関して、バーンズから受けた影響に関して直接に述べてはいないが、何らかの示唆を受けたであろうと推測される。ワーズワスがバーンズから学んだこと、それは1803年のスコットランド旅行で、バーンズの墓を訪れたことについて書いた作品「バーンズの墓にて一死後7年目に」で明らかにされている。

バーンズに歌われた「花」と「つつましい真実」

('humble truth')

1803年の旅行の最初の目的地は、バーンズが晩年を過ごしたダムフリーズであった。バーンズの墓と家を訪ねたが、墓には墓石もなく、バーンズ夫人にも会えず、この土地についてもらった感想は、「ダムフリーズのような詩的でない土地にいたバーンズが哀れである」「バーンズの日々の生活のことを思うと、心が押し潰される」⁵⁾ というものだった。この旅行に関連して、ワーズワスは3篇の作品を書いている。そのうち「バーンズの墓にて一死後7年目に」において、ワーズワスはバーンズとの出会い、そして自分がいかにその詩的源泉をバーンズに負っているかを告白している。

Fresh as the flower whose modest worth

He sang, his genius 'glinted forth,

Rose like a star that touching earth,

For so it seems,

Doth glorify its humble birth

With matchless beams

.....

I mourned with thousands, but as one

More deeply grieved, for He was gone

Whose light I hailed when first it shone,

And showed my youth

How Verse may build a princely throne

On humble truth.⁶⁾

ここでバーンズが歌った「花」とは、バーンズの「山ヒナギクに寄せて、

鋤で掘り返した際に、1786年4月」(“To a Mountain Daisy, on turning one down, with the Plough, in April, 1786”) で歌われる山ヒナギクを指している。「山ヒナギクに寄せて」でバーンズは、苛酷な環境の中でつましく咲く山ヒナギクが、無残にも鋤に掘り返されて泥にまみれて横たわるさまを嘆き、そのような非常な運命は花だけでなく、田舎の乙女にも、そして詩人にも降りかかると述べている。

Such is the fate of artless maid,

 Such is the fate of simple Bard,

 Such fate to suffering worth is giv'n

 Ev'n thou who mourn'st the Daisy's fate,
 That fate is thine – no distant date;⁷⁾

バーンズは「山ヒナギクに寄せて」と対をなすと思われる「ねずみに寄せて、巣の中のねずみを掘り起こした際に、1785年11月」(“To a Mouse, on turning her in her Nest, with the Plough, November, 1785”)においても、「山ヒナギクに寄せて」と同様、予期せぬ運命の打撃と、失われた喜びにたいする悲しみと痛みを述べたあと、巣を失ったという目の前の問題にのみ対処すればよいねずみに対し、過去を見ても未来を見ても希望が持てない自分の苦悩を表している⁸⁾。このような人生の苦悩や重荷について、バーンズはオード「落胆」(“Despondency, an Ode”)においても、「過去も未来も絶望的で、これからの人生も苦勞と絶望の連続かと思うと恐怖におびえるのも当たり前だ。そしてそこから逃れるには墓に行くしかない」⁹⁾と述べている。また「人の運命は嘆くこと、挽歌」(“Man was Made to

Mourn, a Dirge”)では、苦しい生活にあえぐ労働者と、その犠牲の上で安楽に暮らす富める者という不公平な社会の有様に対する、怒りや嘆きを描いている。作品の最後は、抑圧され苦しめられている人々にも、何らかの償いがあるはずだ、との確信が示されてはいるものの、虐げられ重荷に苦しむ人々にとっては、死は祝福であると述べられて終わる。

「バーンズの墓にて」でワーズワスがいう、バーンズが歌った「花」とは、バーンズも含めた日々労働にいそしみながら生活苦に喘ぐ人々のことであり、それを題材にして、日常使われている言葉で包み隠さず表現することが、どのような高尚な題材、表現形式よりも、人々に感動を与えるということを、若きワーズワスはバーンズによって教えられたと感謝しているのである。

バーンズは「つつましい花」(‘the flower whose modest worth / He sang’)すなわち自らを含めた農民や労働者の姿を歌うことで、「つつましい真実」を明らかにして見せた。その「つつましい真実」とは、前述したように、彼らがおかれた状況から発生してくる、貧困、絶望、悲嘆、怒りなどであるが、しかしバーンズの作品は、それらの負の感情のみを表現したものばかりではない。生活の苦境、逆境にあってもバーンズは、社会、政治、宗教、また人々や風習を、常に批判精神を持って見つめ、時にはユーモラスに大らかに生の喜びを歌いあげ、時には鋭く諷刺している。

「小作人の土曜の夜」(“The Cotter’s Saturday Night”)の巻頭に、バーンズはトマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-71) の「田舎の墓地で詠んだ挽歌」(“Elegy written in a Country Church-yard”)の一節を掲げている。

Let not ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor grandeur hear; with a disdainful smile,

The short and simple annals of the poor,¹⁰⁾

この作品には、小作人の家族が、辛い労働に明け暮れた一週間の終わりに集まり、質素な食事を取る土曜日の夕餉の風景が描かれている。バーンズは、貧しい小作人家族の夕餉の風景に、家族の愛情、真実の信仰心、そして揺るがぬ道德心を見だし、彼らのような貧しく正しい人々から、スコットランドの偉大さが生まれると述べている。このように日々貧困と闘いながら生きる人々の、ささやかな喜び、彼らの善良さ、熱い信仰、矜持こそ、バーンズが尊敬し賞賛したものであった。そしてそれはワーズワスが、バーンズの作品から受け取った、「つつましい真実」であったとも言えよう。

「人間が人間に対して行う残酷な行為」

(‘Man’s inhumanity to man’)¹¹⁾

『抒情民謡集』におさめられているワーズワスの作品は、北イングランド湖水地方の農村に住む人々の生活を題材にとりあげたものが多くを占めている。第二版二巻目の最後の作品、「マイケルー田園詩」(“Michael, A Pastoral Poem”)では、羊飼いのストイックな生活や、彼らが置かれた厳しい現実を描いている。それは、実際の田舎の生活とは全く接触の無い上流階級のものであったパストラル、地上のどこにも存在しない楽園の歌を、地上に引き降ろすこと、すなわち序文でいう「天使の涙ではなくて、あたりまえの人間の涙を流す」¹²⁾ 詩を作ることで、社会を動かしている階級の人々に改めて、偶像ではなく人間としての羊飼いの姿を認識させようとしているのではないだろうか。現実には生きている、血の通った人間として見ることで、はじめて相手に対する関心が生まれてくるのである。そしてそれこそワーズワスがこの詩を書くに当たって目的としたことでもあった。

ワーズワスは『マイケル』の主旨について、当時リベラルな政治家として著名であったチャールズ・フォックスに宛てた手紙で「産業社会がもた

らした悪弊」のために「貧しい人々の間の家庭的愛情のきずなが弱まった」ことを嘆き、「兄弟」(“The Brothers”)と「マイケル」の二つの詩の中で、イングランド北部にしかみられない「小自作農」(“statesmen”)と呼ばれる小さな独立した土地所有者の間で存続している家族愛を描こうとした」こと、「彼らの小さな土地が、彼らの家庭的愛情の永遠の集合点となる」こと、そして「このような階層の人間が急速に失われつつある」と訴えている。そして「二つの詩を、新しい時代の波によって引き起こされる害悪から伝統的社会を守ることを意図して書いた」¹³⁾ ことを明らかにしている。

この手紙の中でワーズワスが言う「家族的愛情のきずな」「家族的愛情の集合点」という言葉は、バーンズの「小作人の土曜の夜」を想起させる。土曜日の夜、労働に疲れた小作人が家に帰ると、幼い子供たちが喜び迎え、町や農場に奉公に出ている年長の子供たちも次々に戻ってくる。娘の恋人も加わり、彼らは貧しいが愛情と信仰に満ちた夕べを過ごす。これはまさしく「家族的愛情の集合点」と言えよう。そしてこの小作人の夕餉の風景は、マイケルの夕餉の風景といってもよい。年老いた羊飼いのマイケルとイザベル夫婦、息子のルーク、彼らは勤勉で善良に生きており、彼らの家に毎夜灯されるランプは、彼らを象徴して近隣から「宵の明星」(“The Evening Star”)と呼ばれていた。しかし、このような幸福は続かず、予期せざる不幸によってルークは都会にでることになり、身を持ち崩して外国へ逃れる。マイケルは残された土地を守り、ルークと約束した羊囲いを一人で作り続けるのである。バーンズは「小作人の土曜の夜」で、ここに描かれるような貧しい人々のささやかな喜びが、ずっと続くようにと祈っているが、ワーズワスの「マイケル」ではその幸せは崩壊している。

「兄弟」は、レナードとジェイムズの羊飼いの兄弟の物語である。保護者であった祖父が亡くなって、土地も家も人手に渡り、兄のレナードは船乗りとなって村を出てゆく。20年ぶりに帰郷した彼は、弟がすでに亡くなっていたことを知り、素性を隠したまま村を去っていく。なぜならば

彼の「家族的愛情の集合点」であった土地も家も、そして弟も失われてしまったからである。「マイケル」や「兄弟」以外の作品でも、ワーズワスは「家族的愛情の集合点」を失った人々を描いている。「放浪する女」(“The Female Vagrant”)では、祖先から受け継いだ土地を手放すことを余儀なくされ放浪する父子、つかのまの幸せも戦争によって失い、一人放浪する女を描くことで、富裕な土地所有者の横暴、戦争によって引き起こされる災禍、そしてその一番の被害者となる貧困層の人々の苦しみが語られている。

上記のいずれの作品においても主題となっているのは、前述のワーズワスの手紙に述べられているように、貧しい階級の人々のささやかな幸せが、先祖伝来の土地を失うことで破壊されるという悲劇である。そしてワーズワスは彼らのおかれた苦境に同情し、それを引き起こした社会に憤りを感じて、これらの作品を書いたのである。恵まれない環境に生まれた人間を、社会や政治が、さらに悲惨な状況に追いやること、それはバーンズが「人の運命は嘆くこと、挽歌」で嘆いた、「人間が人間に対して行う残酷な行為」(‘man’s inhumanity to man’)である。貧しい者の犠牲のうえに成り立っている富める者の安楽な生活、貧しい者の苦しみは死が訪れるまで続く、というバーンズの告発、憤激、絶望は激しい。そして奴隷として生きるように運命づけられているのなら、なぜ自由な精神を持たされているのか、金持ちにとって死は罰だが、貧乏人にとっては祝福だ、との皮肉は鋭い。それに比べるとワーズワスの言葉は穏やかである。

I heard a thousand blended notes,
While in a grove I sate reclined,
In that sweet mood when pleasant thoughts
Brings sad thoughts to the mind.

To her fair works did Nature link
 The human soul that through me ran;
 And much it grieved my heart to think
 What man has made of man.¹⁴⁾

この最後の二行には、明らかにバーンズの 'man's inhumanity to man' の響きが感じられる。また冒頭の 'a thousand blended notes' を、バーンズの 'countless thousands mourn'¹⁵⁾ と同様、人々の嘆きと捉えることに無理はないであろう。'sad thoughts' についてワーズワスは、具体的には述べていない。フランス軍のスイス侵攻を指すとの指摘もあるが、作者が明らかにしていない以上、社会状況に対する漠とした不安、苛立ち、不審と考えてもよいと思われる。この作品の中盤から後半にかけて、ワーズワスは自分の物思いから、周囲の自然へと視線を転じ、自然の中に存在する花や鳥、木々の小枝が「喜びにふるえて」('a thrill of pleasure')¹⁶⁾ いるのを見る。自然の中で「喜びにふるえて」いる花や鳥に比べ、人間がほかの人間に苦しみを与えるということ、すなわち 'man's inhumanity to man' という状況をワーズワスは悲しんでいるのである。

ワーズワスとバーンズの違い

これまでワーズワスに見られるバーンズの影響を、おもに『抒情民謡集』の作品を取り上げて述べてきた。ここでは、両者の違いについて、それがどこから生まれてくるのかについて、さらに検討したい。

1841年にワーズワスはある若いスコットランド人に、以下のように述べている。

…Burns in his own sphere, is unrivalled, and that as raising himself into such fame by the study of the objects which constantly met his eye

in his daily life he is worth of all praise; …Burns is the poet of human passions, and of the social enjoyments and rough friendships and little incidents of the life of man in his own grade, but that he never assumes the highest tone which best beseems a poet; that he never spiritualizes, much less sanctifies his conceptions;…while his most beautiful effusions are on a daisy and a mouse, which met his eye as he followed the plough, and which he had embalmed for ever in immortal strains,…[he] nowhere in all his poems mentions the mountains of Arran which lay constantly before him, had he raised his eye or his mind even so high.¹⁷⁾

すなわち、ワーズワスによれば、バーンズは確かに現実の生活を注意深く見つめて、そこからあふれだす感情を言葉に置き換えて、人々を感動させることにかけては匹敵するものがないが、しかしそこに生き生きとした感情や情熱はあっても、それを不変の思想とすることがなかったと言うのである。そしてその主張の補強として、バーンズは掘り返されて埋められるヒナギクや、巣を壊されて逃げるねずみなど、刹那的な存在に目を留めているが、それらすべてを取り囲んでいる永遠の存在である自然に目を向けていないことを指摘している。

確かにバーンズの関心はあくまで、自分を取り巻く現実の生活であり、スコットランドの風土、習慣など農民として直接体験して知りえた事柄から作品を作り出したが、それらは社会、宗教、政治などにたいする風刺詩、民話的なもの、あるいは抒情詩などが主で、ワーズワスのように自然と人間の間を取り扱ったものは少ない。

一方ワーズワスは、「人は自然と交わることで心がはぐくまれ、自然への愛をへて人間への愛を学ぶ」と考えていた。『抒情民謡集』の「諫言と返答」(‘Expostulation and Reply’)では、心を開き、自然から教えを受けるように勧めている。

‘Nor less I deem that there are Powers
Which of themselves our minds impress;
That we can feed this mind of ours
In a wise passiveness.¹⁸⁾

そして、「諫言と返答」と対となる「形勢一変」(‘The Tables Turned’)
においても、「自然を師とせよ」と述べている。

One impulse from a vernal wood
May teach you more of man,
Of moral evil and of good,
Than all the sages can.¹⁹⁾

またワーズワスにとって自然は、幼少の頃より幾多の「時点」(‘spots of time’)²⁰⁾を経験した場であり、従って、生きることに疲れたとき、失意にあるとき、ワーズワスは自然によって育てられてきた自らの過去を振り返り、「時点」の経験を想起することで、ふたたび「活性化してくれる力」を汲み取ることが出来たのである。そして不滅の自然が、人のこころの成長を見守り育んでいることへの信頼を持つことが出来たワーズワスは、掘り返されたヒナギクを見ても、視線を上げて、それを取り囲む自然に目を移すことによって、約束された不滅性を感じ取ることが出来たのである。そのことがワーズワスの作品にある種、楽観的と呼べるような色合いを付け加えたのではないだろうか。しかしワーズワスに比べて、深刻な生活苦にあったバーンズの関心は、あくまで人間にあったと言えよう。より実体験に基づいた、生の感情を注ぎ込まれたバーンズの作品は、ワーズワスの作品に比べて、悲哀、苦悩、絶望の密度が濃いのである。

スコットランドとイングランド、状況は違っているとしても、下層階級の人々の生活の苦しみは同じである。しかし自らが貧困と闘いながら詩作を続けていたバーンズと、豊かではないが、後年まで定職に着かずに詩作に専念できたワーズワスでは、同じものを見ても、反応が違うのは当然であろう。バーンズは「序文」でこう述べている。

To amuse himself with the little creations of his own fancy, amid the toil and fatigues of a laborious life; to transcribe the various feelings, the loves, the griefs, the hopes, the fears, in his own breast; to find some kind of counterpoise to the struggles of a world, ...these were his motives for courting the Muses, and in these he found Poetry to be it's own reward.²¹⁾

キルマーノック版『詩集』の内容は、バーンズの一般的に普及したイメージ、すなわち多くの恋愛と酒に耽溺し早世した詩人というものにとちがって、恋愛詩は少なく、農民の苦しい生活を描いたもの、宗教や社会風刺などが主になっている。バーンズの詩は、感情を正直にありのままに吐露したものが多く、ワーズワスのように意図して、例えば、不幸にあっても不屈の精神を持つ人マイケルを描くことで「伝統的な農村生活が崩壊の危機にあることを広く社会に広めよう」とするなど、作品に明確なメッセージ性を持たせようとしたかどうかについては分からない。しかし、貧しい農民詩人バーンズが描き出した「つつましい真実」('humble truth') は、スコットランドだけでなくイングランドやアメリカも含め、多くの知識人たちから歓迎された。その中に 17 歳のワーズワスもいたのである。「マイケル」の冒頭の部分で、ワーズワスはこの詩を「自分の後を継いでくれるであろう若い詩人のために」²²⁾ 書いたと述べている。この言葉に、バーンズから多くを学んだ自分の姿を振り返り、自らもバーンズのように若い世代に影響を与

える詩人になりたいという、ワーズワスの願いを読み取ることは、うがちすぎとは言えないのではないだろうか。

ま と め

ワーズワスは生涯を通じて、バーンズを崇拜し、その影響を受けたことを認めている。バーンズの『詩集』序文には、詩の題材を自分の身の回りのことにとること、実際に話されている言葉を使うことが述べられているが、それはワーズワスが『叙情民謡集』序文で述べたことに重なっている。しかし、実際の作品においては、両者には大きな違いがある。それはバーンズの作品が作者を取り巻く過酷な運命を予感させ、怒り、悲しみ、諦観、恐怖が表現されているのに対し、ワーズワスの作品には何かしらの救いを感じられることである。この違いは両者の置かれた立場や環境の違い、とも言えるだろうが、ワーズワスには、自然を癒しや不滅性と結び付けて考えることが出来たことが、彼の作品に楽観的な物の見方を付与したのではないかと考えられる。

- 1) William Wordsworth to S.T.Coleridge, February 27th, 1799 (ed. E. de Selincourt, rev. C. L. Shaver, A. G. Hill, *The Letters of William and Dorothy Wordsworth*, 6vols. (Clarendon Press, 1967-93), I, p.256)
- 2) ed. Jared Curtis, *The Fenwick Notes of William Wordsworth* (Bristol Classical Press, 1993), p.170
- 3) Burns, Robert, *Poems chiefly in the Scottish dialect 1786* (Revolution and Romanticism, 1789-1834; A series of facsimile reprints chosen and introduced by Jonathan Wordsworth, Woodstock Books, 1991), p.3 以下 (*Poems*) 本稿でのバーンズの引用はすべてこれによる。
- 4) Wordsworth, William, *Preface to Lyrical Ballads* (前川俊一訳注, 研究社, 1980), p.6-9 以下 (*Preface*) 本稿での *Preface* の引用はすべてこれによる。
- 5) We were glad to leave Dumfries, ...where we could think of little but poor Burns, and his moving about on that unpoetic ground...there is no thought surviving in connexion with Burns's daily life that is not heart-depressing.

(Aug. 18th)

(Wordsworth, Dorothy, *Recollection of a Tour Made in Scotland*. Introduction, notes, and photographs by Carol Kyros Walker (Yale University, 1997), p.43)

- 6) "At the Grave of Burns 1803 Seven Years After his Death" , ll.19-24, 31-6
本稿中でのワーズワスの引用はすべて以下による。(ed. E. de Selincourt, Helen Darbishire, *The Poetical Works of William Wordsworth*, 5vols. (Clarendon Press, 1952-59)

- 7) "To a Mountain Daisy, on turning on down, with the Plough, in April, 1786", ll.31-50

- 8) The best-laid schemes o mice an men

Gang aft agley,
An lea'e us nought but grief an pain,
For promis'd joy!

Still thou art blest, compar'd wi me!
The present only toucheth thee:
But och! I backward cast my e'e,
On prospects drear!
An forward, tho I canna see,
I guess an fear!

(To a Mouse, ll.39-48)

- 9) Oppress'd with grief, oppress'd with care.

A burden more than I can bear,
I set me down and sigh;
O Life! thou art a galling load,
Along a rough, a weary road,
A wretches such as I!
Dim-backward, as I cast my view,
What sick'ning scenes appear!
What sorrows yet may pierce me thro
Too justly I may fear!
Still caring, despairing,
Must be my bitter doom;
My woes here shall close ne'er

But with the closing tomb!

(Despondency - An Ode, ll.1-14)

10) "Elegy written in a Country Church-yard", ll.29-32

11) Man's inhumanity to man

Makes countless thousands mourn!

(Man was Made to Mourn, a Dirge, ll.55-6)

12) Poetry sheds no tears 'such as angels weep', but natural and human tears;
(Preface, p.22)

13) In the two Poems, "The Brothers" and "Michael" I have attempted to draw a picture of the domestic affections as I know they exist amongst a class of men who are now almost confined to the North of England. They are small independent proprietors of land here called statesmen, men of respectable education who daily labour on their own little properties. The domestic affections will always be strong amongst men who live in a country not crowded with population, if these men are placed above poverty. But if they are proprietors of small estates, which have descended to them from their ancestors, the power which these affections will acquire amongst such men is inconceivable by those who have only had an opportunity of observing hired labourers, farmers, and the manufacturing Poor. Their little tract of land serves as a kind of permanent rallying point for their domestic feelings, as a tablet upon which they are written which makes them objects of memory in a thousand instances when they would otherwise be forgotten. It is a fountain fitted to the nature of social man from which supplies of affection, as pure as his heart was intended for, are daily drawn. This class of men is rapidly disappearing. W.W. to Charles James Fox, January 14th, 1801 (*Letters*, I, pp.314-5)

14) "Lines written in early spring", ll.1-8

15) "Man was Made to Mourn, a Dirge", l.56

16) "Lines written in early spring", l.16

17) Muirhead, James Patrick, "A Day with Wordsworth," *Blackwood's Magazine*, June 1927, 735-36

18) "Expostulation and Reply", ll.20-4

19) "The Tables Turned", ll.20-4

20) There are in our existence spots of time

Which with distinct pre-eminence retain

A vivifying virtue. Whence, depressed
By false opinion and contentious thought,
Or aught of heavier or more deadly weight
Is trivial occupations and the round
Of ordinary intercourse, our minds
Are nourished and invisibly repaired —
A virtue by which pleasure is enhanced,
That penetrates, enables us to mount
When high, more high, and lifts us up when fallen.

(*The Prelude*, 1805, Bk.xi, ll.257-67)

21) (*Poems*, p.2)

22) Therefore, although it be a history

Homely and rude, I will relate the same
For the delight of a few natural hearts;
And, with yet fonder feeling, for the sake
Of youthful Poets, who among these hills
Will be my second self when I am gone.

(*Michael*, ll.34-39)

参考文献

岡地嶺『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』, 開文社, 1990 年

添田透『ワーズワス点描』, 大阪教育図書, 1979 年

岡地嶺「ロバート・バーンズとイギリス・ロマン派」中央大学人文科学研究所編『ヴィ
ジョンと現実 19 世紀英国の詩と批評』, 中央大学出版部, 1997 年

木村正俊「バーンズとワーズワス—バーンズがワーズワスに及ぼした影響につい
て」(『CALEDONIA』No.31, 2003 年)

Averill, James H., *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering*, Cornell
University, 1980

Davis, Andrew, 'Wordsworth and Burns: The Anxiety of Being under the
Influence' in Carol McGuirk, (ed.), *Critical Essays on Robert Burns*,
(G.K.Hall&Co., 1998) Levinson, Marjorie, *Wordsworth's Great Period Poems*,
Cambridge University, 1986

Pinton, E.B., *A Wordsworth Companion*, Macmillan, 1984